

えっぴ かじゅつとう 処方解説・越婢加朮湯

吉村 吉博 先生

東京都豊島区 日本統合医療学園・健康堂



【効 能】

疏風宣肺、清熱、利水

本方は脾気虚をとמוなう全身の浮腫に対する代表処方である。外界の風邪が、脾の運化の停滞によって生じる水湿と結びつき、肺気の宣発を阻滞するため水道が通調できなくなって痰飲が停滞し、痰飲が肌表（皮膚）に氾濫して全身の浮腫となる。このため浮腫は顔面にはじまり上半身に顕著にみられるようになる。このため浮腫は顔面にはじまり上半身に顕著にみられるようになる。このような急激な全身性の浮腫を風水という。

また初期に風水によって陽気が閉じ込められて発散できなくなると内熱を生じ発熱し、傷津（水分を奪うこと）によって口渴が生じる。風水が表にあるときは脈が浮となるが、小便不利が強い場合は沈となる。ただし、小便自利（尿がよく出て）、津液が消耗して口渴を生じる場合には適用しない。

従って、本方は疏風宣肺的作用によって肺気を宣発して水道を通調する（宣肺利水）とともに、内熱を清し、健脾利水的作用によって浮腫（水腫）や脾気虚に対して用いる。

【出 典】

金匱要略：3世紀の初めに張仲景が記した傷寒雜病論は、2部に分かれ、傷寒（急性熱性病）については「傷寒論」、雜病（慢性病）については「金匱要略」として伝わった。傷寒論では、傷寒の病態を三陰三陽（六病位）に分け、それぞれの病期の病態と、適応処方を記しているが、金匱要略では慢性病の治法を論じ、その中には循環器障害、呼吸器障害、泌尿器障害、消化器障害、皮膚科疾患、婦人科疾患から精神疾患までの疾病が含まれているもので、全25巻からなる。

【越婢加朮湯の組成】

麻黄・石膏・生姜・大棗・甘草・白朮

【処方解説】

基本は越婢湯で、越婢湯に白朮を加えたもので、風水や湿熱痺証に対する代表処方である。浮腫がつよいときに、健脾利水の白朮を加え組織内の水分を血中にひきこみ排尿させる。

麻黄が主薬で、辛温解表（体温上昇で発汗作用があり解熱に働く）や宣散肺気（気管支平滑筋弛緩、利尿作用）がある。石膏は、辛寒清熱（解熱・鎮静・消炎作用）により肺熱を下げる作用と、生津作用（肺を潤す）もある。そのため、花粉症における目の炎症やかゆみ等にも適応できる。甘草・大棗は、麻黄の

強い薬性を和らげ、諸薬を調和（抗アナフィラキシー作用）させる。生姜は末梢血管を拡張して石膏の重い性質による胃のもたれなどの胃腸機能を改善し、また石膏の清熱作用によって消耗される津液を保護する。また生姜は、胃腸機能を促進した軽度の利尿作用を示す。白朮は、脾の水湿を除くとともに薬効を裏に向かわせるため、祛風除湿（体表である皮膚や筋肉の水分を吸収）と健脾燥湿（胃腸の水分を吸収）の作用がある。

越婢という名称は脾気（消化の働き）を発越する（発散させる）ので越婢湯と名付けられたという説がある。ただし、脾が婢となったのは誤字と考えられている。

組 成	麻 黄	石 膏	生 姜	大 棗	甘 草	白 朮
薬 性	辛微苦・温	辛甘・寒	辛・温	甘・温	甘・平	甘微苦・温
分 類	辛温解表	清熱瀉火	健脾・解表	補気・諸薬調和		利水滲湿
効 能	解表、止咳平喘、利水消腫	清熱、止渴、除煩	解表、解毒、健胃（止嘔）	滋養（補脾胃）、安神、薬性緩和	補気、止痛止咳、清熱解毒（生）	健脾補気、燥湿、止瀉、利水消腫
適 応 症 状	疏風宣肺、清熱、健脾燥湿					
	風水、湿熱痺					
	浮腫、口渴、発熱、小便不利（尿量減少・乏尿）、悪風、自汗、関節痛・腫脹、舌苔薄白・脈浮滑					
病 機	風邪→脾の運化低下→水湿停滞→肺の宣発阻滞→水湿が肌表に氾濫→浮腫（顔面・上半身）・自汗 ↓+湿熱邪→関節・筋肉侵襲→湿熱痺→関節炎 ↓小便不利（乏尿） ↓風水（発熱・口渴・咳嗽）					
疾 患	①浮腫：急性腎炎、慢性腎炎、浮腫、急性結膜炎、関節水腫、関節リウマチ ②湿疹、皮膚炎：じんましん、帯状疱疹→浸出液の多い皮膚病変					

【中医適応症】

- ①風 水：アナフィラキシー型アレルギー反応・炎症により、全身の毛細管透過性が亢進して生じる浮腫である。急激に発生する全身の浮腫と尿量減少で、浮腫は顔面にはじまり全身に及ぶ。皮膚には光沢があり圧すると陥凹するがすぐにもとにもどるもの。初期には、発熱・口渴・悪風・咽痛・咳嗽などの表証を伴う。舌苔は薄白・脈は浮滑。
- ②湿熱痺：筋肉や関節のしびれ、だるさ、痛みなどを特徴とした病態で、四肢関節の疼痛、局所の発赤、腫脹、熱感、口渴、尿量は少なく濃いなどの症状を呈する。舌紅・苔黄、脈数。

【日本漢方の適応症】

体力中等度あるいはそれ以上で、むくみがあり、口が渇き、汗が出て、尿量が減少する傾向

↓
虚実：実証 随伴症状（気血・臓腑弁証）：浮腫（乏尿・自汗）、風水（発熱・口渴）

↓
次の諸症：浮腫（むくみ）、関節痛、関節炎、湿疹、夜尿症、目のかゆみ・痛み

↓
主症状（現代病名）：関節痛、関節性リウマチ、急性結膜炎など

【類似処方】 ※太字は越婢加朮湯と共通生薬

☆防己黄耆湯（防己・白朮・黄耆・生姜・大棗・甘草）

気虚に伴う風湿痺証に適する。かぜを引きやすい、自汗（汗が出やすい）などの気虚症状と身体が重い、倦怠感がある、小便不利などの水湿停滞の症状が同時に現れるもの適する。

☆越婢加朮附湯（麻黄・石膏・生姜・大棗・生甘草・白朮・附子）

越婢加朮湯に附子を加えた処方で、浮腫、口渴、自汗、小便不利、関節痛などに手足の冷えなどの症状がある場合に適する。

☆麻杏甘石湯（麻黄・石膏・杏仁・生甘草）

越婢加朮湯に杏仁を加え、白朮、生姜と大棗を抜いた処方で、肺熱の咳嗽・呼吸困難に対する処方である。越婢加朮湯が風水による表熱証であるのに対して、本方は肺熱の裏実熱証に適する。

☆続命湯（麻黄・石膏・桂枝・乾姜・杏仁・川芎・人参・当帰・炙甘草）

慢性化した関節炎（関節周囲の筋肉や組織の萎縮に当帰・桂枝・川芎で循環を促進して、杏仁で浮腫を軽減する）や脳血管障害（当帰や川芎による血管拡張、人参による全身や消化機能を高める）に対する処方である。

【合 方】

帯状疱疹でむくみがある場合は竜胆瀉肝湯、湿潤性の皮膚炎で痒みの強い場合は消風散を合方する。乾燥性の皮膚炎には四物湯、炎症が強い場合は黄連解毒湯、腹部が冷えて痛む場合は呉茱萸湯を合方する。